

もほど遠かりぬべし、よりにて異本に、武藏下總の國とあるも、得たりともおもはれず、いかさま
そのころあなひせしもの、多磨川をさして、是なん隅田川なりと、みだりにおしへしならん、
すべて此記を見るに、道すがらの名だゝる所は、ことごとく、沙汰あれど、多磨川のことにおよ
ばず、是らにてもおもひ合するに、多磨川と隅田川のあやまりより、武藏と相模の中とは、かき
しなるべし、さもあらんには、諸越が原へ出しもむべなり、ことに女のことなれば、おしへしま
まをしるせしなるべし、猶下の太井川にも辨せり、

〔吾妻鏡〕治承四年十月二日辛巳、武衛源頼朝相乘于常胤廣常等之舟檝、濟オホ大井オホスミダ隅田兩河、精兵及三
萬餘騎、赴武藏國、

〔義經記三〕よりともむほんの事

ちせう四年九月十一日、むさしと玄もつけのさかいなる、まつどの玄やう、いち河といふ所に付
給ふ、御せい八萬九千とぞ聞えける、こゝにばんどうに名をえたる大河一つ有、此河のみなかみ
は、上野國とねの庄、藤はらといふ所よりおちて、みなかみをし、すゑにくだりては、さいご中將
のすみだ河とぞ名付たる、うみより玄ほさしあげて、みなかみには雨ふり、こうすいきしをひた
してながれたり、ひとへにうみを見るごとく、水にせかれて、五日とうりうし給ひ、すむだのわ
り、りやう玄よにちん取て、やぐらをかき、やぐらのはしらには、馬をつないで、げんじを待かけた
り、○中すけ殿源頼朝仰られけるは、江戸の太郎、八かこくの大ふく長者ときくに、よりとともがたせ
い、此二三日、水にせかれて、わたしかねたるに、みづのわたりに、うきはしをくんで、よりとともにか
せいをむさしのくに、わうじ、いたばしにつけよとぞの給ける、○中さてこそ、ふとひ、すんだ、うち
こえて、いたばしにつき給ひけり、

〔武藏國隅田川考〕按に、此記○義經記によれば、利根川より流れ來るといへど、是は隅田川の本流に